闇と光のなかを

ガンに奪われしわが子へ捧げる父の記録

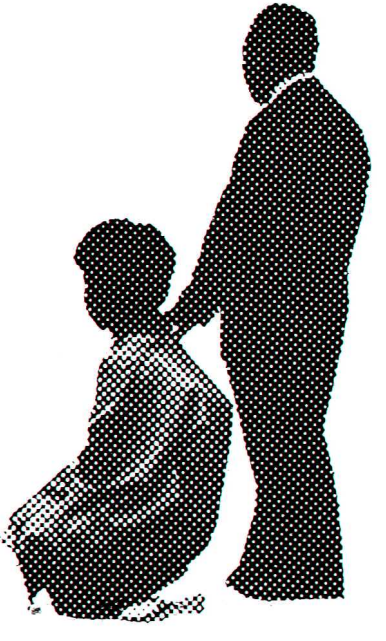
市村　勝

闇と光のなかを

ガンに奪われしわが子へ捧げる父の記録

市村　勝

学研



闇と光のなかを　©1965

著者　市村　勝

昭和40年4月1日初版印刷
昭和40年4月10日初版発行　価380円

発行者　古岡秀人
印刷者　竹内勝之

発行所　学習研究社

東京都大田区上池上町 264
電話（720）1111（大代表）
振替口座東京 1 4 2 9 3 0

つきせぬ愛情にささえられて

武者小路　辰子

子を失うのはどんなにつらいことか。ここに子をガンにうばわれた父の記録があります。信じるべき近代医学をもってしても今なおいやせず、痛苦をやわらげることもかたく、どんなに医師や看護の人々の働きがあっても、その痛苦とたたかう子をみつめる親としてはたえがたいものがあります。身も心も生活のすべてを切りきざんで、親はもっていきばのない憤りにもえ、その不幸を納得できるはずもありません。しかもなお、人間として立派だった邦彦さんの思い出はすべてを清いものにしています。そして父上に理性をもってたえること、いやもっと頭をあげてガンに抗議することをすすめはげましています。邦彦さんはまことに美しく、若い、あまりにも若い生涯を生きぬきました。つきせぬ愛情にささえられた親子による本と申し上げたいのです。

市村君の悲願

四国管区警察局通信部無線通信課長
元関東管区警察局通信部無線通信課中野送信所長　岸野　豊

「邦彦の病気はなおらないのです」

目から大粒の涙が流れ落ち、やがてせきを切ったように嗚咽する市村君の姿に、どうなぐさめてよいのか、私はしばらく言葉が出なかった。窓に雨しぶきが、はねかえっていたのが、今も印象に残っている。ゼミノーム――長男邦彦君の手術後の検査結果がそう出た日であった。いつも朗らかな市村君は、人のいやがるような仕事も進んでやる、まじめな性格であり、昼休みなどに邦彦君の話をするのが自慢であった。

邦彦君は成績が平均してすぐれており、ずっと学級委員に選ばれ、人望があり、特に文学的才能にめぐまれていることなど、私も何回か聞いた。

そんな時の市村君は、いきいきと瞳が輝き、何かを追っているようでもあった。

「私は、邦彦の将来を楽しみに生きているのです」ともいっていた。

あの日から、市村君の、ひたむきな病院巡りと、医学書あさりが始まった。

なんとか邦彦の命をつないでくれる病院はないだろうか、医師は……。

役所の勤めが終わると、オーバーのえりを立て、寒風氷雨をついて、あらゆる手づるを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

求めて、都内の病院をかけ回った。ゼミノームとは、どんな症状で、どんな治療をすればよいのだろう。類似の病気はないのだろうか……。

医学書のページを必死にくっては、くいいるように読みあさった。

自分の持つすべてのものを代償にしても、邦彦君の生命を守ろうとする、異常なまでにひたむきな親心に、私は、おそろしささえ感じた。そして誤診であることを願うと共に、奇跡の起こることを、ひそかに祈らずにはおられなかった。

ゼミノームという病気は、ガンの一種で、いったんは、経過がよくなるけれど、二、三か月から数か月後に淋巴腺にそって再発し、ついには全身が冒されてしまうという恐ろしい病気だそうである。また、なお悪いことには前ガン症状的なものは、しろうとには、わからず、痛みを感じたときには、もうおそいと聞いている。

こんな恐ろしい病気に、これからの日本をになう若い生命を、いやおうなしにつみとられてしまうとは、なんともやりきれないことである。

市村君の悲願がみのって、このような病気の研究が促進され、世の多くの人々が救われる時が一日も早くくることを祈ってやまない。

昭和三十九年九月

目次

1 憂曇華の花……9
平和な家庭にふと黒い影が――。天井に咲く白い小さな花。やがて最初の徴候。

2 ああ、ゼミノーム……43
手術。邦彦君の腹痛は腫瘍――ガンが原因だった。父の悲しみの歴史が始まる。

3 闇のかなたに……81
病床につきそう父の脳裏を数々の追憶が交錯してゆく。母のこと。愛のこと。

4 死の宣告……121
転移。〈お気の毒です……〉医師たちに絶望視され、もはや奇跡だけが――

5 長い夜の彷徨……173
襲いくる死とたたかい、病魔にいどむ父と子。それは悲しくも美しい愛の姿――

[6] 邦彦よ、永遠なれ……209
目を閉じた邦彦君。〈もっと生きたいな〉その最後の言葉。彼岸の中日だった。
遺稿・霙・市村邦彦……263
□市村邦彦君のゼミノームについて・倉持正雄・小板橋定夫……119
□東京厚生年金病院整形外科カルテからの要約……255
□ありし日の市村邦彦君・中村和三……260
あとがき……277

・カバーと扉の写真は市村さん夫妻

装釘 / 石狩竟・中根良夫

闇と光のなかを

邦彦に捧げる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

憂曇華の花

砂漠の嵐のような悲しみの感情をくぐりぬけると、わたしの心の中は急にがらんどうとなった。なにもかも、ほうりなげたくなるような寂寞の日々のあとに、このところの十日ばかりがあるのだ。

空虚な心に、やわらかく入りこんで充たしてくれるものがやってきたのではないかと、あわてて期待の手をさしのべようとするのだが、これはあわれなしぐさなのだと、すぐに気がついた。

邦彦のいた部屋には、机がぽつんと腰をすえているばかりで、わたしの心は襲いかかってくる寂しさにとりひしがれていた。

けっきょく、微笑を浮かべた邦彦の写真を飾ってある仏壇と対座しているときにだけ、乾ききった心をなにかがそっとおおってくれ、わたしの傷は癒やされるのだ。

「しゃく・ほう・かん・しん・し」と繰り返しつぶやいていると、不思議なことに重たく押しつけてくるいきおいで邦彦につけられた戒名――「釈邦歓信士」という位牌の金ぱくの文字が、わたしにせまってくるのであった。

わたしは時の過ぎ去っていくのもわすれてそこに坐りつづけた。ただそうしていることだけが安らぎなのであった。

冥目していると、ありし日の邦彦の声が聞こえてくる。

——父さん、死にたくない。死ぬのなんかいやだ。ね、お父さん、なんで黙っているの。あえぐような声は、それからしばらくのあいだ、波のうねりのように低くつづいた。

——父さん、もっと生きたいんだ。お母さん、手をしっかりとにぎっていておくれよ……ああ、ぼくはもうだめだ、暗くなっちゃってなんにも見えやしないや。お父さん、やっぱり家がいちばんいいね。お母さん、そんなに泣かないでくれよ、みっともないじゃないか。ぼくの病気はいったいなんという病気なんですか、先生。ああ、あれはなんだ。円盤だ。火星人がくるぞ。ぼくはいまエンパイアー・ステート・ビルの上にいるんだ。ああ、もうなんにも見えない。こんどは皇太子だ、生まれかわるときには皇太子殿下、皇太子だ……。

こずえをわたる冬の風音のように、途切れとぎれに聞こえてくる邦彦の臨終のときの声はそこで消えた。

ひどく緩やかに立ちのぼる線香の煙のなかに、わたしの視線を押しもどすように、じいっと見つめる微笑を浮かべた邦彦がいた。

黒のつめえり服を着た上半身の邦彦の写真を見ていると、その顔がもうひとつの顔に重なって揺れ動きはじめる。なんという名の医師であったか、その解剖医の顔がわたしを押

しつぶすように浮かびあがってきた。

――まったく、わたしたちが予想もしなかったひどいガンの転移でした……。

かさかさに乾いた、それでいてだんだんとふくれあがってくるような声が、わたしに甦ってくる。

――お子さんが最後まで失わなかった精神力は、いまさらながらわたしたちに大きな感動をあたえてくれました……。

――ほんとうに立派な死でしたね……。

陽がかたむいても、電灯のスイッチをいれないままの部屋はもう暗かった。わたしは〈立派な死でしたね〉という声を心の中でつぶやきながら、しずかに鉦をたたいた。

海の底のような、ほの暗い部屋の空気を余韻がわたっていき、その鉦の音が心の底にふかく沈みこんでいく。

わたしは、再び、眼を閉じた。

しずかなときの流れは、やがて、ずるずると過去の時間をひっぱりあげ、わたしの閉じた瞼の中に、暮れなずんだ多摩川の河原の情景があざやかにあらわれてきた。

――その日、わたしは久しぶりに邦彦と孝行の二人の子をつれて魚釣りに出かけた。

立川市のわたしの家から多摩川べりまでは歩いても二十分とはかからない。アメリカ空軍基地の正門（ゲート）へ通じる〝フィンカム道路〟から甲州街道へぬけ、それを南へ二、三百メートルいくと、多摩川にかかった日野橋にでる。

ながいその橋を渡りきり、河原へおりる小道を左へとると、そこはもう小石の多い堤で、下流のほうへしばらく下ったあたりに、わたしたちがいつも糸をたれる釣り場があった。

もう肌寒さをおぼえるころだったから、あれは秋も終りに近い日のことではなかったろうか。

そのあたりには、解禁シーズンになると、アユ専門の釣り師たちが大勢くりこんできた。しかし、わたしたちはもっぱらハヤ一本やりで、ときおり、ひっかかる三、四寸のフナ、コイ、それにウナギなどが、いわゆる大きな獲物（えもの）といった程度の、いたって無邪気な太公望であった。

大きく岸辺がえぐられたそこは、本流をはずれていたが、緑青によどんだ水面にゆるやかな渦がたえず巻いており、見るからに魚影が感じられた。いつのころからか、わたしたちはそこをアナ場と呼びあい、父子三人だけしか知らない秘密の場所となっていた。

わたしたちは、川面に鉛色の夕もやが低く這うように流れはじめるまで、赤い小さなウ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com